



Title	十津川方言音声のグロットグラム : ガ行子音・ダ行子音
Author(s)	真田, 信治; 尾崎, 喜光
Citation	待兼山論叢. 日本学篇. 1988, 22, p. 43-53
Version Type	VoR
URL	<a href="https://hdl.handle.net/11094/56495">https://hdl.handle.net/11094/56495</a>
rights	
Note	

*The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

# 十津川方言音声のグロットグラム

— ガ行子音・ダ行子音 —

真 田 信 治

尾 崎 喜 光

## 0. はじめに

真田の担当する社会言語学演習では毎年近畿地方各地をフィールドに方言調査を行なっている。すでにこれまで大阪・和歌山府県境域（1983年）、紀ノ川流域（1984年）、和歌山県中部域（1985年）と調査を進め、それぞれ報告も行なってきた（徳川・真田1986、1988）。1986年度にはこれらに引き続き十津川流域をフィールドとして調査を行なった。本稿はその調査結果のなかで、音韻の項目として調査を行なったガ行子音とダ行子音の動態について考察するものである。

## 1. 調査の概要

調査の経過についてはいずれ別に詳細な報告がなされる予定であるのでここでは簡単に述べておくことにする。

調査期間は1986年7月25日～29日、および1987年3月7日～8日である。

調査地点は十津川沿い（or 国道168号線沿い）に、南端の河口和歌山県バンクワ新宮市オオジ王子町から北端の盆地部奈良県フキ御所市ムロ室までの間、26地点である。直線距離にしておよそ90kmある。調査は南の新宮市側から北上する形で行

なった。

インフォマントはこれら26地点から、その地点生え抜きの方を4つの年層（若年〈10～29歳〉、壮年〈30～49歳〉、実年〈50～69歳〉、高年〈70歳～〉）各1名ずつ（性別は問わない）、合計104名選んだ。最終的には調査結果をグロットグラム（地理×年齢の分布図）の形にまとめることをめざした。

調査者は、大阪大学文学部社会言語学講座に当時在籍していた院生・研究生が中心となった。

音韻のセクションの調査方法は、カードに書かれた単語をインフォマントに読んでもらうというやり方ですすめた。読んでもらった順に全項目示すと次のとおりである。

<名古屋> <鍵>(絵) <午前> <午後>

<踊り>(絵) <腕>(絵) <井戸>(絵) <枝>(絵) <仇><sup>あだ</sup>

上段がガ行子音を、下段がダ行子音を見るための項目である。(絵)とあるものは、理解を助けるためにカードにさし絵を添えた項目である。読みのむずかしい<仇>にはやむをえずルビを振ったが、これ以外は全てルビは振っていない。

項目の選定は真田が行なった。調査者は調査時にこれらの発音について調査票にチェックしたが、のちに改めて尾崎が全部聴きなおした。本稿での分析に用いられるデータはこの尾崎の判定によるものである。

データの分析・作図等にあたっては、大阪大学大型計算機センターにおいて荻野綱男氏開発のGLAPSを利用させていただいた。(その際特に田原広史氏〈愛知教育大学〉からは全面的な協力を得た。またデータ入力では宮治弘明氏・村中淑子氏・井上文子氏らの協力を得た。)

## 2. 分 析

### 2.1 ガ行子音

ガ行子音については、語頭の位置と語中の位置とについて調査した。

<午前>のゴが前者にあたり、これ以外は全て後者にあたる (<午後>は「後」がチェックポイント)。まず語頭のガ行子音から見ていく。

語頭のガ行子音を問題にしたのは、これが [ŋ] で発音される地域がこの付近にあるからである。村内英一 (1982) は和歌山県にこれが在ることを報告しているし、徳川・真田 (1986) では紀ノ川流域の老年層に全域的にこれが存在することを確認している。しかし徳川・真田 (1988) は、和歌山県中部域 (田辺市・龍神村) にはほとんどこれが見られないことを報告している。

我々の調査の結果は図1のとおりである。図はタテに地点を (上が北側)、ヨコに年齢層を (左側ほど若い) とってある。Gは [g] 音であることを示している (なお空欄は欠測値)。この図によると、<午前>のゴの子音は全地点・全年齢層とも [g] であって、この地域には語頭の [ŋ] は全く存在していないことが判る。

次に語中のガ行子音について見ていく。

まず図2を御覧いただきたい。これは、国立国語研究所編『日本言語地図 第1集』の第1図「カガミ (鏡) の-G-の音」を真田が略図化したものである (出典は徳川宗賢編1979)。これによって日本全土の語中のガ行子音の分布を眺めることができる。大局的には、近畿以東の [ŋ] と中国以西の [g] の対立のようである。紀伊半島の部分に注目すると、一般的に [ŋ] が分布する中で十津川流域付近に [ɰg, ~g] が見られる。そこで我々のこの調査では、[~g] [ŋ] さらには [g] の3音がどのように分布し、どのように変化していつているのかについて注目した。

図 1

===== GOZEN =====					午前				
+-----+-----+									
I	G	G	G	G	I	Z	ロ	ゴ	セ
I	G	G	G	G	I	Y	入	エ	
I	G	G	G	G	I	X	ノ	ハラ	ゴショウ
I	G	G	G	G	I	W	ウ	タ	三ツ
I	G	G	G	G	I	V	シ	ヨウト	ツ
I	G	G	G	G	I	U	タ	チカウト	ツ
I	G	G	G	G	I	T	サ	カモト	オ
I	G	G	G	G	I	S	ツ	シ	トウ
I	G	G	G	G	I	R	ウ	イ	ト
I	G	G	G	G	I	Q	ナ	カ	ト
I	G	G	G	G	I	P	タ	ニセ	ノ
I	G	G	G	G	I	O	ウ	エノ	ツ
I	G	G	G	G	I	N	タ	コツ	カ
I	G	G	G	G	I	M	カ	ザ	ワ
I	G	G	G	G	I	L	オ	ハ	ラ
I	G	G	G	G	I	K	オ	リ	タ
I	G	G	G	G	I	J	ヒ	ラ	タ
I	G	G	G	G	I	I	ナ	ナイ	ロ
I	G	G	G	G	I	H	ハ	キ	ホ
I	G	G	G	G	I	G	ウ	エ	チ
I	G	G	G	G	I	F	ウ	ケ	カ
I	G	G	G	G	I	E	ニ	シ	キ
I	G	G	G	G	I	D	ノ	キ	ク
I	G	G	G	G	I	C	タ	カ	シ
I	G	G	G	G	I	B	カ	ミ	ホ
I	G	G	G	G	I	A	オ	シ	マ
+-----+-----+									
10- 30- 50- 70- AGE									
NO OF CASES = 104									
G ( 101 ) G									

図 2

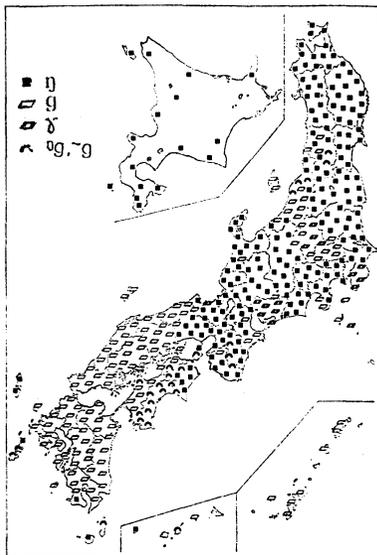


図 3 ~ 図 6 を御覧いただきたい。図中、G は先ほどと同じく [g] を、N は [η] を、% は [%g] を表している。図の下の ( ) 内はケース数である。

まず [%g] の分布を見てみることにする。[%g] のケース数の多い <鍵> <午後> <名古屋> を見るとはっきり判るが、この [%g] はほぼ十津川村北端の地点 Q から南に分布する。そしてこれは十津川河口の新宮市のような都市部にまで連続している。かなり広域に分布していることが判る。図 2 の分布をほぼ確認する結果となった。しかし地点 Q 以南においても [%g] は連綿として続いているという訳ではなく、[η] や [g] によって虫食い

図 3

=====  
KAGAMI-2  
=====

鏡

I	G	G	G	N	I	Z	ムロ	ゴセ
I	G	G	G	N	I	Y	スエ	
I	G	G	N	N	I	X	ノハラ	ゴジョウ
I	G	G	N	G	I	W	ワタ	ニシヨキ
I	G	G	N	N	I	V	シヨウト	ニシヨキ
I	G	N	G	N	I	U	タテカワト	ニシヨキ
I	G	G	N	N	I	T	サカモト	オオトウ
I	G	N	N	N	I	S	ツシト	ウ
I	G	G	N	N	I	R	ウイ	ウ
I	G	G	N	N	I	Q	ナカトノ	
I	G	N	N	N	I	P	タニセ	ト
I	G	N	N	N	I	O	ウエノシ	ト
I	G	N	N	%	I	N	タコツ	ツ
I	G	N	N	N	I	M	カサ	カ
I	G	%	N	N	I	L	オハラ	カ
I	G	N	N	%	I	K	オリタチ	ワ
I	N	N	G	N	I	J	ヒラタニ	
I	G	N	N	N	I	I	ナナイロ	
I	G	%	%	N	I	H	ハキ	ホシゲ
I	G		N	N	I	F	ウエチ	ウ
I	G	N	N	N	I	G	ウケカ	ワ
I		N	N	N	I	F	ウケカ	ワ
I		G	N	%	I	E	ニシキヤ	クマノガワ
I	G	N	N	N	I	D	ノキ	ガワ
I	G	N	N	N	I	C	タカタ	シゲ
I	G	N	N	N	I	B	カミホンマチ	ウ
I	G	G	N	N	I	B	カミホンマチ	ウ
I	G	G	N	N	I	A	オオシマチ	ウ

=====  
+-----+  
10- 30- 50- 70- AGE  
NO OF CASES = 104

G	(	40)	g
N	(	55)	ŋ
%	(	6)	~g

図 4

=====  
KAGI  
=====

鍵

I	G	G	G	N	I	Z	ムロ	ゴセ
I	G	G	N	N	I	Y	スエ	
I	G	G	N	N	I	X	ノハラ	ゴジョウ
I	G	G	N	G	I	W	ワタ	ニシヨキ
I	G	G	N	N	I	V	シヨウト	ニシヨキ
I	G	N	N	N	I	U	タテカワト	ニシヨキ
I	G	G	N	%	I	T	サカモト	オオトウ
I	G	N	N	N	I	S	ツシト	ウ
I	G	G	N	N	I	R	ウイ	ウ
I	G	G	%	N	I	Q	ナカトノ	
I	%	%	%	N	I	P	タニセ	ト
I	G	%	N	N	I	O	ウエノシ	ツ
I	G	G	%	N	I	N	タコツ	ツ
I	G	N	N	%	I	M	カサ	カ
I	G	%	%	%	I	L	オハラ	カ
I	G	%	%	%	I	K	オリタチ	ワ
I	G	G	G	N	I	J	ヒラタニ	
I	G	N	%	%	I	I	ナナイロ	
I	G	N	%	G	I	H	ハキ	ホシゲ
I	N	%	N	I	G	ウエチ	ウ	
I	G	N	N	G	I	F	ウケカ	ワ
I		%	%	N	I	E	ニシキヤ	クマノガワ
I	G	N	%	%	I	D	ノキ	ガワ
I	%	%	%	N	I	C	タカタ	シゲ
I	G	G	%	%	I	B	カミホンマチ	ウ
I	G	%	N	%	I	A	オオシマチ	ウ

=====  
+-----+  
10- 30- 50- 70- AGE  
NO OF CASES = 104

G	(	41)	g
N	(	35)	ŋ
%	(	25)	~g

状態にある。また年齢差という側面に注目してみるならば、高年層(70-)から壮年層(30-)にかけては、虫食い状態ながらも[~g]はけっこう保たれているものの、若年層(10-)になると[~g]は急速に減少してきており、この方言音の衰退が特に最近著しい事がうかがわれる。

[~g]の出現には語による差もいくぶん見られる。特に<鏡>は他の3語に比べて[~g]が著しく少ない。他の3語で[~g]であった話者は<鏡>では[g]ではなく[n]となるケースが多いことから考えると、<鏡>の

図5

NAGOYA-1 名古屋									
+-----+									
I	G	G	N	N	I	Z	ムロ	ゴセ	
I	G	G	N	N	I	Y	スエ		
I	G	G	N	N	I	X	ノハラ	ゴジョウ	
I	N	G	N	N	I	W	ウタ		
I	G	N	G	N	I	V	シヨウト	ニシヨ	
I	G	N	N	N	I	U	タテカウト	ニシ	
I	G	G	N	N	I	T	サカト	オオト	
I	G	N	N	N	I	S	ツシト	ウ	
I	G	N	N	N	I	R	ウイ	ト	
I	G	G	%	N	I	Q	ナカトノ		
I	%	N	N	N	I	P	タニセ		
I	G	%	N	N	I	O	ウエノシ	ト	
I	G	N	G	%	I	N	タコツ	ツ	
I	G	N	N	%	I	M	カサヤ		
I	G	N	%	N	I	L	オハラ	カ	
I	N	G	N	N	I	K	オリタチ	ワ	
I	N	N	G	G	I	J	ヒラタニ		
I	%	N	G	N	I	I	ナナイロ		
I	G	%	%	N	I	H	ハキ	ホシ	
I	N	%	%	N	I	G	ウエチ		
I	G	N	N	G	I	F	ウケカ	ウ	
I	N	%	%	I	E	ニシキヤ	クマノ		
I	G	G	%	%	I	D	ノキ	ガフ	
I	%	N	%	%	I	C	タカタ	シ	
I	N	G	%	N	I	B	カミホンマチ	ウ	
I	G	%	N	N	I	A	オオシマチ		
+-----+									
NO OF CASES =					10-	30-	50-	70-	AGE
G	(	32)		g					
N	(	50)		j					
%	(	19)		~g					

図6

GOGO 午後									
+-----+									
I	G	G	G	N	I	Z	ムロ	ゴセ	
I	G	G	G	N	I	Y	スエ		
I	G	G	N	N	I	X	ノハラ	ゴジョウ	
I	G	G	G	G	I	W	ウタ		
I	G	G	G	G	I	V	シヨウト	ニシヨ	
I	G	N	G	N	I	U	タテカウト	ニシ	
I	G	G	N	%	I	T	サカト	オオト	
I	G	G	G	N	I	S	ツシト	ウ	
I	G	G	N	N	I	R	ウイ	ト	
I	G	G	%	N	I	Q	ナカトノ		
I	G	%		G	I	P	タニセ		
I	G	%		N	I	O	ウエノシ	ト	
I	G	G	%	N	I	N	タコツ	ツ	
I	G	%	N	%	I	M	カサヤ		
I	G	%	%	%	I	L	オハラ	カ	
I	G	%	%	%	I	K	オリタチ	ワ	
I	%	N	G	%	I	J	ヒラタニ		
I	G	N	G	G	I	I	ナナイロ		
I	G	%	%	G	I	H	ハキ	ホシ	
I	G	%	%	G	I	G	ウエチ		
I	G	%	%	N	I	F	ウケカ	ウ	
I	%	%	%	%	I	E	ニシキヤ	クマノ	
I	G	%	%	%	I	D	ノキ	ガフ	
I	G	G	G	N	I	C	タカタ	シ	
I	G	%	%	N	I	B	カミホンマチ	ウ	
I	G	G	N	N	I	A	オオシマチ		
+-----+									
NO OF CASES =					10-	30-	50-	70-	AGE
G	(	56)		g					
N	(	22)		j					
%	(	23)		~g					

ミの鼻音の影響を受けて子音の部分全体が鼻音化されたためなのかもしれない。

さてこの [ŋ] の周辺には [ŋ] と [g] とが分布しているが、高い年層の部分に注目すると基本的には [ŋ] の分布域のようである。〈鍵〉〈名古屋〉を見るとそれがよく判る。特に北隣りに強い。これもほぼ図2を確認する結果となった。しかしこの [ŋ] の分布域も若い年層になるに従って [g] に置き換えられてきている。この新勢力 [g] の分布の仕方(特

に地点Z～R間)を注意して見ると、南側では [g] は若年層に限定され、北側ほど [g] が高い年齢層にまで及んでいる。このことから [g] は北の盆地部から侵入して来た音であるらしいことがわかる。さて若年層 (10-) では全地点が [g] で連続してしまっているような感があるが、壮年層以上で [˜g] の出てくる地点については、いかにも方言性を感じさせるこの入り渡り鼻音を取り去り共通語的にしたその結果なのかもしれない (つまり [˜g] - [˜] = [g])。壮年以上の [˜g] の分布の内部に見られる [g] についても同じ事が言えるかもしれない。若年層においてはこのほかに、[g] は、[ŋ] に対して新たな prestige を持った発音として (Hibiya 1988参照) テレビ等を媒介に広まった可能性も考えられる。いずれにせよ、南部 (地点Q以南) の [˜g] と北部の [ŋ] はともに将来完全に消滅し、やがては全域全年層 [g] になることが予想される。

なお、最後に語毎に [g] の頻度を比べてみると、〈午後〉でかなり [g] が高いことが判る (カッコ内のケース数を参照)。これは、この語でこの音は形態素の頭に来ており、さらにまた「後」は別の語で語頭としても現われうるためであろう。また「午」の [g] の影響が及んでいることも考えられる。

## 2.2 ダ行子音

近畿諸方言に見られるザ行・ダ行子音の混同についてはこれまでもしばしば指摘されて来ているところである。これにさらにラ行子音もからんで一層複雑になる。今回の調査では、標準語でダ行子音が対応する語ばかり5語を調査した。そして問題の子音の直前の母音の種類によって実現の仕方がどう変わって来るかをも見ようとした (なお直後の母音は広母音 [a, e, o] で統一)。一部結論から先に言うと、問題の子音が [r] で実現されることは皆無に近かった (〈枝〉と〈仇〉で各1名 — 地点Xの若年





図11

井戸					
I D O		D Z		AGE	
I	D	D	D	D	I Z ムロ <u>ゴセ</u>
I	D	Z	Z	D	I Y スエ
I	D	Z	D	Z	I X ノハラ <u>ゴジョウ</u>
I	D	D	Z	D	I W ワタ <sup>ツ</sup>
I	D	D	D	D	I V シ <sup>ツ</sup> ヨウト <sup>ツ</sup>
I	D	D	D	D	I U タテカウト <sup>ツ</sup>
I	D	D	D	D	I T サカモト <sup>ツ</sup>
I	D	D	Z	Z	I S ツシ <sup>ツ</sup> ト <sup>ツ</sup> ウ
I	D	D	D	D	I R ウイ
I	D	D	D	D	I Q ナカ <sup>ツ</sup> トノ
I	D	D	D	D	I P タニセ
I	D	D	D	D	I O ウエノシ <sup>ツ</sup>
I	D	D	D	D	I N タコツ
I	D	D	D	D	I M カサ <sup>ツ</sup> ヤ
I	D	%	%	%	I L オハラ
I	D	D	%	D	I K オリタチ
I	D	D	D	D	I J ヒラタニ
I	D	%	D	D	I I ナナイロ
I	D	D	D	D	I H ハキ <sup>ツ</sup>
I	D	D	D	D	I G ウエチ
I	D	D	D	D	I F ウケカ <sup>ツ</sup> ウ
I	D	D	D	D	I E ニジシキヤ <u>クマノ</u>
I	D	D	D	D	I D ノキ
I	D	Z	D	D	I C タカタ <sup>ツ</sup>
I	D	Z	D	D	I B カミホンマチ <u>シ</u>
I	D	D	D	D	I A オオジ <sup>ツ</sup> マチ

10- 30- 50- 70- AGE  
NO OF CASES = 104

D	( 87)	d
%	( 5)	~d
Z	( 9)	(d)z

とが考えられるかもしれない。  
ガ行子音は現在共通語において  
[ŋ] [g] とともに意味の違いを生  
じることなく併存の形で許容さ  
れている。そして問題の [~g]  
は、いずれも許容されるこれら  
[ŋ] [g] のいわば折衷のような  
音であり、そのため比較的許容  
されやすいのであろう。これと  
平行的に考えるならば、[~d]  
は [n] と [d] の折衷とでも  
言える音ということになる。し  
かしこの [n] と [d] は意味  
の違いを生じさせる音である。  
そのため [~d] のような音は  
[~g] に比べて許容されにくく、  
その結果分布域もこのようにか  
なり狭められているのではない  
だろうか。なおこの [~d] も

[~g] と同様だんだんと廃れてきている音であり、特に若年層 (10-) では  
皆無の状態である。

さてこの [~d] の周囲は [d] であって、これはかなり強く分布して  
いる。そしてこの [d] の中のところどころに [z] が分布している。

[z] の分布はそれほど大きなまとまりを示してはいないようだが、それ  
でも地点 W~Y に壮年層以上にやや強い分布が見られ、さらに地点 B~  
D、地点 G、地点 S などにもいくらかまとまった分布が見られる。もっと

もこれらの地点においても若年層に至っては [z] は完全に失われている。先の [~d] も若年層では完全に失われており、若年層においては全域（地点Xは例外）標準語音 [d] が支配しているのである。

最後に直前の母音による差について。さほど顕著な差は見られないようであるが、やや細かく見ると、[~d] は直前の母音が [i、u、e] の時よりも [a、o] の時の方が現われやすいようであるし、また [z] はそれが [i、u、o] の時よりも [a、e] の時の方が現われやすいようである。しかしこれは語彙的な差であるのかもしれない、母音の差と断定するには慎重を要しよう。

#### 参考文献

- 徳川宗賢編 (1979) 『日本の方言地図』 (中央公論社)
- 徳川宗賢・真田信治 (1986) 「和歌山県紀ノ川流域の言語調査報告」 『日本学報』 5
- 徳川宗賢・真田信治 (1988) 「和歌山県中部域の言語動態に関する調査報告」 『日本学報』 7
- Hibiya Junko (1988) *A Quantitative Study of Tokyo Japanese*. University of Pennsylvania, unpublished Ph. D. thesis
- 村内英一 (1982) 「和歌山県の方言」 『講座方言学 7 近畿地方の方言』 (国書刊行会)

(文学部助教授)  
(文学部助 手)